第4回コウノトリ未来・国際かいぎを開催

と　き：10月30日・31日　　ところ：市民会館文化ホールほか

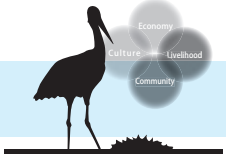
「野生復帰がもたらすもの」とは？

国際生物多様性年である本年、1年をかけて実施してきた関連事業の締めくくりとして、4回目を迎える「コウノトリ未来・国際かいぎ」を開催しました。

「野生復帰がもたらすもの」をテーマに深めた議論、他地域との連携に向けた動き、今後を見据え採択された宣言など、2日間にわたるかいぎの様子をお伝えします。

▲林　良博実行委員長の開会宣言でかいぎがスタート

秋篠宮ご夫妻にもご臨席いただきました



オープニング

秋篠宮さまのおことば

私は、平成6年と平成17年に行われたこのかいぎに出席いたしましたが、特に平成17年には最初の試験放鳥に参加し、34年ぶりに但馬の空を舞うコウノトリの姿に強い感銘を受けました。そのときから5年を経て、今では40羽を超えるコウノトリが自然界で暮らしていると聞きます。また、コウノトリ育む農法を実践するなど、人と自然が共生する地域づくりが着実に進められていることは、大変心強いことであります。

ご承知のとおり、かつては身近に存在していたコウノトリは、39年前に日本の空から姿を消しました。そのコウノトリを、以前の生息地である人里に帰すという世界でもまれな取組みは、国の内外で大変注目を集めております。

このことは、コウノトリのような大型鳥類が生息可能な環境が、私たち人間にとっても安心して暮らせる環境であるという一つの実例であるとともに、このかいぎが永年にわたって発信し続けてきたメッセージが広く受け入れられ、浸透してきていることの証しでありましょう。

このような中、海外からの研究者を含め、多くの関係者が一堂に集い、「野生復帰がもたらすもの」をテーマに、その社会的、経済的、文化的意義をさまざまな事例を踏まえながら皆で考えていくことは、大変意義深いことであると思います。

ただ、この地においてコウノトリの野生復帰事業を先導してこられた増井光子博士と池田啓（ひろし）博士が、本年、相次いで鬼籍（きせき）に入られました。さらなる活躍をしていただける方々だっただけに、誠に残念でなりません。

第4回コウノトリ未来・国際かいぎが、実り多いものとなり、将来にわたって人とコウノトリが共に生きる豊かな環境が各地に広がっていくことを期待し、開会式に寄せることばといたします。

郷公園による経過報告
山岸　哲

現在、野外のペアには7つのなわばりが存在し、その間の平均距離は2・7キロメートル。子育て期間中以外は、郷公園公開ケージでの給餌に依存する傾向が強い。

試験放鳥期間の巣立ちは年に5・4羽、死亡が1・8羽、つまり年に3・6羽のペースで増加している。

今後、本格的な野生復帰の段階に入る。小さな増減の波はあっても、適正個体数に安定していくはず。それが豊岡で一体何羽なのか、どのような個体をつくっていかなければならないのか。早急にグランドデザインを描く必要がある。

野外個体群のマネジメントの課題は3つ。①自活の促進、②生息場所の整備と管理、③個体群の連携（国内での分布拡大、国際的連携の推進）である。

県立
コウノトリの郷公園長
山岸　哲

生態系と生物多様性の経済学
パバン・スクデフ

TEEB研究リーダー
パバン・スクデフ

TEEBは、見えない自然の価値を可視化するプロジェクト。われわれは自然の一部であり、存続し続けるには自然と協調しなければならない。しかし、経済システムも政治システムもそのことを忘れがちだ。

タイ南部でマングローブ林をエビの養殖場に変えた例。企業の利益のみを考え、公共益は無視された。サイクロンからの防護、漁場の育成など国民のための本当の利益の方が実は多額であり、同様のことを世界中に当てはめると大変な額になる。

自然の価値を認識し、実証し、取り入れる。生態系サービスへの支払いの好例が、豊岡で行われているコウノトリ野生復帰の取組みなのだ。

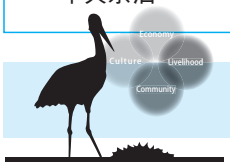
コウノトリと共に生きる
中貝宗治

平成6年、第1回国際かいぎの際には、「放鳥」という明確な目標があった。その瞬間を目指して、やらなければならないことを具体化していった。では、今後10年は何を目指すのか。私は、「豊岡エコバレー」の実現と考えている。

そのためには、①環境経済戦略（環境行動の経済への内面化）、②知の創造と集積（研究と実践の共鳴）、③教育（環境行動を当たり前のものに）、④Fly to the world（世界との連携）、⑤リーダーシップ（先頭を走る責任、他地域への支援・協力）が必要だ。それができれば、豊岡はエコバレーになれる。

野生復帰事業のベースにある「命への共感」を胸に、今後も歩みを進めたい。

豊岡市長
中貝宗治



基調講演など

サイチョウの研究とその保全
ピライ・プーンスワッド

マヒドン大学教授
ピライ・プーンスワッド

サイチョウは、アジアの熱帯とアフリカに生息。タイには13種がいて、うち2種は絶滅寸前である。

その特徴的な容姿ゆえ、ペット取引を目的に、地元住民によるヒナの密猟が横行していた。しかし、説得が実り、今では、かつての密猟者が研究・保全活動のアシスタントに変身している。

取組みの継続には知識の継承が必要。ユースキャンプや巡回授業、植樹など若者への教育を積極的に行い、サイチョウ保全への理解を広めている。また、都市部の人たちから1つの巣に150ドルを寄付いただく里親プログラムも展開し、平成6年以来、保護された巣から500羽のサイチョウが巣立っている。

一愛鳥家から見たコウノトリの未来
河野洋平

世界中で生物の絶滅が心配される中、絶滅どころか復活し、再生した豊岡のコウノトリの例はまだ。それを知ってもらったことは、日本で行われたCOP10の中で最も重要なことだった。それだけに、もっと頑張らなければならない。それは豊岡の責任であり、われわれ日本人の責任でもある。

鳥たちが命をつないできたのは、平和があったから。平和だからこそ、コウノトリは次の世代に命をつなぐことができる。コウノトリの未来は皆さんが担っている。復活・再生を支えてきた皆さんの気持ちがずっと続いていくこと、さらに多くの協力者・理解者が増えれば、その未来は明るい。

前衆議院議長
河野洋平